



千枚田を守り抜いた偉大な先人たちへの感謝の灯

お田植感謝の夕べ

～みんなで灯そう千枚田～



四谷の
千枚田だよ



第248号

開催日時 令和6年6月1日(土) 午後7時から
 主催 鞍掛山麓千枚田保存会
 共協 愛知県連八雲だんご・ヤマサちくわ・古民家カフェたてば
 協力 愛知連八雲だんご・ヤマサちくわ・古民家カフェたてば
 指導員 土と地域の皆さん・JA愛知東



お田植感謝の夕べ
くみんなで灯そう千枚田く
開催のお知らせ

この催しは「昔の農休み」と捉え、作業道(景観道)に千五百本のロウソクを灯し、日々、厳しい棚田の保全管理に費やす耕作者を労うと共に、地域の宝「四谷の千枚田」を連谷地域が一体となり、保存継承を忌憚なく語る場(呑み、喰いは無論)となれば、との思いから企画した。

急傾斜地の沿道の灯火「ともしび」が幻想・幽玄の世界を醸し出し、訪れる人々の束の間の癒しの場となり、評判が評判を呼び、大きな催しとなってしまった。

催しには元手がかかる。会場では地域定番の「鳥長の皮肝」や味噌が焦げる香ばしい香りがたまらない「八雲だんご」や「ヤマサちくわ」のキッチンカーなどがイベントに華を咲かせる。また、若い頃は今より「マシ」だったと自負する「棚田っ娘」の千枚田五平餅など、思い思いのバザーを展開。会場には来年の開催を占う協力金箱なども設置する。

お知らせ
五月二十五日(土)、午前八時から「お田植感謝の夕べ」に伴う景観環境整備を行います。

また、天空を彩る打ち上げ花火

(十五発)も好評で、現在、予約殺到中。

くどいようであるが、催しには元手がかかる。そうだ、今年も辰年だ。夕闇の天空に龍が登る様を見れば縁起もいい。感動・感激したら協力金箱に心尽くしを惜しみなく戴ければ、お互いに幸運間違いなし、来年開催の目処が立つ。二十一時閉演。耳を澄ますと、静寂に仏法僧の鳴き声も聞くことができる自然の宝庫「四谷の千枚田」。是非、お出かけください。

飢えを凌いだ「タニシ」

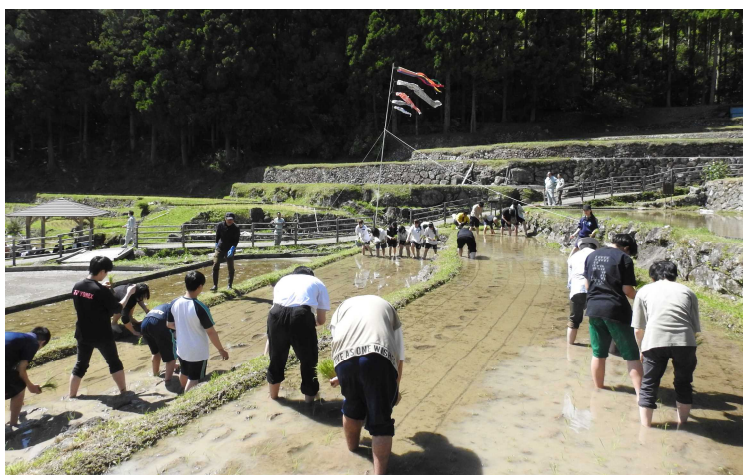
「長篠合戦のぼりまつり」は長篠の戦いで倒れた両軍将士の霊を慰めるために、関係将士の紋入りののぼり数千本を献植して行うまつりで、毎年五月五日に長篠城跡を中心に開催される。鎧・兜に身を固めた鉄砲隊による火縄銃の演武、勇壮な長篠陣太鼓が盛大に行われ、多くの人で賑わう。

奥平貞昌は武田軍の籠城攻めに堀の「タニシ」で飢えを凌いで城を守り、織田・徳川連合軍の援軍で勝利。その功績で貞昌は織田信長の一字をもらい「信昌」に改名、また徳川家康の長女「亀姫」を娶とり、出世を果たした。信昌はそれもこれも「タニシ」で飢えを凌ぎ、生き延びることができたのもタニシのおかげと感謝。今でも大分県中津市(中津城では「たにし祭」)を盛大に行っている。(千枚田のタニシを奉納したこともある)第五十九回長篠合戦のぼりまつりには(初開催から毎

年)千枚田のタニシを奉納。

田植え①

将来、食のプロを目指す豊橋調理製菓専門学校(千枚田)の学生たちは平成十八年から四谷の千枚田で、食の原点である米づくり「一粒のコメの大切さ」を学ぶ稲作体験学習(田植え、田の草取り、稲刈り、脱穀を実践している。



この体験学習は新城市鳳来総合支所地域課整備係を窓口、保存会が受け入れて実施しているものである。

五月九日、学生二十六名は午後一

時に千枚田を眼下に一望できる「ふれあい広場」で市鳳来総合支所請井課長の司会で新城市や四谷の千枚田のPRを兼ねた歓迎挨拶、愛知県新城設楽農林水産事務所建設課小松本課長から施設整備(農道)等、千枚田の関わり方の説明、東海農政局愛知県拠点野中地方参事官から「食の安全安心」などの説明の挨拶を頂き、高低差二百メートルを一気に駆け下り、田植えの方法や稲の一生などの説明を聞き、学生たちは素足で田んぼに入り、前もって引かれた線の上に「ミネアサヒ」の苗を二本から三本づつ丁寧に植えた。

田植え②

五月十二日、豊橋名産「ヤマサちくわ」の社員研修(二十名の一環とした田植えが原田英史(理事、ふるさと・水と土指導員)の指導で行われた。同社は毎年の恒例行事として四谷の千枚田の保存継承に貢献、特に、今年には作付け枚数も増やしていただき、感謝を込めた挨拶をさせていただいた。



「エッセイ」 トロいことをしたもんだ

四月二十九日、午後三時半頃田んぼの代掻きも終わり一息をついた。そう、田んぼにかかるタケノコを切ろうと、(成竹を切ると田んぼに倒れるし、竹箒が田んぼに落ち、排水路に詰まり面倒くさい)丁度、田んぼに居た地主の「孝ぼお」にタケノコを切らしてもらおうで、伝えたなら「孝ぼお」もいくらでも切ってもらってもいいで、全部でも切っておくれんと快諾。そういやあ「みっちゃん(嫁っこ)」がどうかしたかと聞いたら、それがのん：ワラビ取りに行つて、ずっこけて足の骨を折っちゃつてのん、飯炊きから洗濯まで自分でやらにやあならんで、まいっちゃうぞん：と聞き、何処に災難が待ち構えているか、互いに気を付けまいかん：と声を掛け、田んぼに邪魔になるタケノコを六本ほど切つた。何時も鹿が滑り降りる急斜地で、鹿も下りない場所のもう一本も切ろうと、下からは上がれないので上から降りようとした途端、腐葉土とザバ土に足を踏み込み四尺の高さを頭が先に滑り落ちてしまった。しばらくは身動きもできない。これから始まる田植えが出来なくなつたら：等々と余計な思いが出てきたら、「孝ぼお兄弟」が大丈夫かん。救急車は：、家まで送らあだが、何とか車で家に辿り着き、そ

のまま寝床で首を冷やし寝ていたが起きることも、寝ることも自力ではできない状態。寝ていても五月一日からの田植えが気にかかる。女房は「体の方が大事だ、今年田んぼを休んだらどうだ」と諭すし：「早朝人目にかからない、五時頃からそつと家を抜け出し、少しづつ、少しづつ、何とか田植えを終えた。痛さで車の中で休んでいるところ、村雲伸ちゃんがスクーターで田んぼの水の見廻りに、わざわざ戻ってきて「どうしただい、安じゃあないかい」と、事情を話したら、無理せんない、明日は植えちゃうで、手伝うで：無理しちゃあかんぞい」と親切が嬉しかった。また、丸八製菓の鈴木社長も早朝から駆け付け、三枚の段々田んぼを初体験ながらも植えてくれた。社長も棚田のコメづくりの大変さを想像以上に体感していたようにうた。

足場の悪い竹藪は登るのは難儀だが、落ちるのは「アツ」という間だ。今回は、落ちると痛いことと、人の親切が身に染みたが、痛いのもう懲りた。

二十余年書き続けた「千枚田だより」欠版にしたくないので寝床から失礼。痛さと格闘中の五月十一日

今後の予定

鳳来寺小学校「五月十四日、代掻き十七日、田植え(NHK取材予定)

行 令和六年五月十五日
鞍掛山麓千枚田保存会
発 文 責 小山舜二